

あぶら通信

創刊号

1988年 1月 9日 あぶらむの会発行

〒506 岐阜県高山市山田町1274-1

TEL 0577(35)1830



飛驒便り

新春のお慶びを申し上げます。

この「あぶらむ通信——創刊号」を手になさる皆様には、お慶びのうちに新年をお迎えのことと存じます。新しいこの一年も皆様一人々々の上に、神の豊かな祝福と平安がありますように心よりお祈り申し上げます。

私たちもこの飛驒の地で、感謝のうちに「あぶらむ元年」を迎えました。あぶらむの会頑張れと、多くの励ましが記された賀状に感謝しつつ、こうして元旦の夜、本年の初仕事としてペンを走らせている私です。そういう私の顔は漆にかぶれ、バルタン星人かお岩様のようにはれあがっています。何か私たちの今後を象徴しているようですが、漆の美しさを得るにはこのかぶれは避けて通ることが出来ません。この見るも無残な顔は産みの苦しみの象徴と、勝手に解釈している私です。

元旦の朝の気温は-9度でこの冬一番の寒さでした。一冬の記録をと、日々の最高低気温を記けていますが、-8~9度というありきたりの気温ではものたりなくなり、いつ-18度という昨年の記録を破るのかと、びっくりするような寒さを期待しているから不思議です。厳しい寒さに打ちひしがれて小さくなるのではなく、寒さに対しても遊び心をいつまでも持ちたいと願っています。

去年は土地購入決定とともに、八代先生を代表世話人に、「あぶらむの会後援会」を発足させていただきました。心暖かに出来上ってきた趣意書を手にした時、もう嬉しくて嬉しくて、これですべてが出来上ったような錯覚におちいり、女房と二人で祝杯をあげました。「あぶらむの会」にお寄せ下さる皆様のお気持ちに心より感謝申し上げます。

そして暮もおし迫った28日、第一回目の土地代金を支払い、やっと1/3の土地取得が完了いたしました。全く夢のようです。三年程で候補地が見つければ上出来と思っていたのに、もうここまで。あまりのテンポの速さに私自身戸惑っている状態です。全てが神様の計画の内なのでしょう、不思議さと感謝で一杯です。

12月30日、朝日新聞の社説「難破船上の踊りいつまで」を興味深く読みました。国としても、一人ひとりの個人としても、私たちは変わらなければならない時代

がとっくに来ているのに、人々はあるような物とお金の上にあぐらをかき、日本でしか通用しない価値観や思考様式に安住して我が世の春を謳歌している、そんな日本の現状を難破船にたとえて鋭い警告を発していました。

私が私であることを保証してくれているもの、そのような存在基盤を根底から奪われた体験を皆様はお持ちでしょうか。年配者の方には戦争がその一つだったと思います。そして、私の人生の教師である沖縄の癩園の人々も……。

私にもささやかな体験があります。それは神学校一年生の時で、そのころ年に3週間、社会福祉施設での実習がありました。私たちはある精神病院で看護師として実習にあたりましたが、私だけはもっと患者の側に立っての体験ということで、患者として体験入院しました。(院長、事務長以外、私の身分は秘密でした) 実習の始まる日、当分は不自由な生活と、仲間と近くの食堂でカツ丼を食べ、ビールを飲んだ私、その数時間後には鉄格子の中で粗食に耐えなければなりません。今日では人権が強調されていますが、当時はまだまだ大変な時代でした。きわめて不十分な食事、いつも空腹で見る夢は食べることで青空の下で遊ぶことばかり。階級制度ができていて、力ある者が弱い者の食事を奪ってしまうことなど日常茶飯事、いつも泣きを見るのは成人精薄者ばかりでした。

飢えるということは不思議なもので、大豆の佃煮など、始めは漠然と「豆の佃煮」と日記に記していたのが、最後には「豆佃煮9粒」とその数まで記しているのです。そして前日より一粒でも多いと得をしたような気持ちになった私でした。

それまでの私は、聖書の中の教えをそれなりに実践できると思っていました。「飢えている人がいればそれに食わせ、渴わいている人がいればそれに飲ませなさい」、私は不十分ではあるがそれなりに出来る、またそのようにしなければならぬと思っていました。しかし、実際に飢えた時、私は他人のものを奪うことはしませんでした。わずかな食物を奪われたみじめな者に分けてあげることは出来ませんでした。そんな自分の姿を目にした時、それまで私がもっていた価値観や倫理観などがガラガラと大きな音をたてて崩れ去っていったのです。何故ならば、私がそれまでもっていた諸価値観はいくつかの保証の上に成り立っていたものであって、全てが借りものだったからなのです。それに気づいた時のショックは相当なものでした。以来私は、不十分でもいい、思いと言葉と行いが一致した言葉を自分に持ちたいと願ってきました。

しかし、よく考えてみれば、私たちの人生で私たちが拠って立っている前提がある日突然に奪い去られてしまうことがあります。病気、事故、離別等、様々な要素によって私たちは常にゆさぶられています。自分が自分であることを保証してくれているもの、私が拠って立つ前提が奪い取られた時、そこにどのような自分が残るのか、人間の価値は、余分なものをはぎ取った後の裸の姿にあるのではないのでしょうか。

今日の日本はあまりにも、物質的豊かさという前提によりかかりすぎているように思います。それが崩れ去った時、そこにどのような日本が残るのでしょうか。人生の良き旅人は、それらの前提が奪われても奪われても尚、自分自身であることを求めてやまない人であるように思います。

年のはじめ、私たちの誰しもが新しい日記や手帖を手にします。この一年の日付以外は白紙です。この白紙の上に一日一日、確実に私たちの現在、未来、そして過去が記されて行くのです。新しく迎えたこの年、私の生活の中で何が、どのように記されて行くのかと思うと小さな身震いを覚えます。私たちの生活が平穩無事であることが奇蹟のように思えてなりません。しかし、新たなるこの一年、たとえどのような出来事が起ころうとも、全てを受けとめて生きて行きたく念じています。

終りになりましたが、土地取得、後援会発足と共に、この「あぶらむ通信」も準備号の役割を終え、創刊号へと移らせていただくことに致しました。これからはこの通信を通して、あぶらむの会の現状をお伝えすると共に、私たちの周囲の様々な問題を共に考えあって行きたく願っています。

新しい年、皆様お一人お一人のご多幸を、この飛驒の地よりお祈り申し上げます。

あぶらむの会

代表 大郷 博

あぶらむの会発足にあたって

あぶらむの会後援会代表世話人 八代 崇

「あぶらむの会」が発足しました。「あぶらむ」と聞いても何のことかさっぱり分からない人もいますので、わたしの考えていることを申し上げてみましょう。

アブラムという人は、ユダヤ教徒、キリスト教徒、イスラム教徒のすべてから諸国民の始祖とみなされている人ですが、それは旧約聖書・創世紀17章18節にある

「わたしはあなたと契約を結ぶ。

あなたは多くの国民の父となるであろう。

あなたの名は、もはやアブラムとは言われず、

あなたの名はアブラハムと呼ばれるであろう。

わたしはあなたを多くの国民の

父とするからである。」

という記述に由来していると考えられます。創世紀によると、このアブラムという人は神の命令によって、甥のロトとともに神の示した約束の地を目指して旅立ち、途中でロトは「すみずみまでよく潤っていた」ヨルダンの低地を選び、アブラムはカナンの地に住むようになったといわれています。のちにこの出来事を新約聖書のヘブル書の著者は

「信仰によって、アブラハムは、受け継ぐべき地に出ていけとの召しをこうむった時、それに従い、行く先を知らないで出ていった。」(11. 8)

と記しました。アブラムは、ただ神の約束を信じて旅に出た、そして神はその約束を守られた、それが聖書を記した人々やイスラム教徒の今日に至る確信なのです。

理論と実践の相克ということがよく言われます。立派な理論であっても実践に至らない、反対に、実践はあるが、しっかりした理論的裏付がないため、一時的に線香花火のように燃えても、長続きしない、といったことを指しているのでしょうか。

9月の初めに盛岡で日本聖公会主教会が開かれ、わたしも出席してきました。会期中の一日、わたしたちは岩手少年刑務所を訪問しました。そこに収容されている少年（といっても20～27才の人々でしたが）の多くは、覚醒剤取締法違反で有罪となった人達ですが、最近の若者なので、みんな体は大きく、おっかない感じを与えました。わたしたちは、看守の後側から彼らにいろいろ質問したのですが、その時感じたことは、看守の肩ごしに語りかけ、覚醒剤が氾濫している現代日本社会を抽象的に批判することは簡単だけれど、少年たちがなぜ覚醒剤を打たねばならなかったのかを彼らの身になって一緒に考えてやることは、理論を振り回すよりはるかに難しいことだということでした。少年たちが刑期を終わって訪ねてきたら、あわてて居留守をつかうのではないだろうか、と。

人は人権について語り、平和について叫び、恵まれないアジア・アフリカの人々との協働を声高らかに呼びます。しかし、実際には何もしない人が多いのです。

あぶらむの会は、これまで活動を通して、だれよりもよく理論と実践の相克を克服し得た大郷司祭が、川上廣之町長を始めとする国府町の人々の暖かい理解と支援を得て始めようとする実践教育活動の会です。人間はすべてアブラム同様旅人であるという確信から、共に旅する人々にどのように奉仕できるかを考え、かつ実践する会です。とかく、理論に走りやすいタイプの人には、そんなことをやって、と批判しがちです。実際、1億円を上回る資金をどうして造るのか、そういう危惧の念もでるでしょう。しかし、大郷司祭を動かしているものはアブラムの信仰だと、わたしは思います。先に引用したヘブル書の著者は、信仰を説明して、

「信仰とは、望んでいる事がらを確認し、まだ見ていない事実を確認することである」（11. 1）

と記しています。「行く先を知らないで」飛出したアブラムのように、大郷司祭はその確信していることを神は必ず実現してくれると信じているのだと思います。

わたしたち一人ひとりが旅人です。その旅をどのように続けようとしているのかを、わたしたちは問われています。ロトのように目で見て「すみずみまでよく潤っていた」ヨルダンの低地を選ぼうとするのか、それとも、アブラムのようにただ神の約束を信じようとするのか。

支え手の一人として

あぶらむの会后援会世話人 甲藤善彦

大郷博先生の姿を思い浮べると、偉大なる宣教の旗手、聖パウロがマケドニア地方第1の都であり、その弟子テモテと共にローマの植民都市であったピリピに住む人びとへ送った手紙（四：4～7）が、私の脳裏に甦る。

「あなたがたは、主においていつも喜びなさい。繰り返して言うが、喜びなさい。あなたがたの寛容を、みんなの人に示しなさい。主は近い。何事も思い煩ってはならない。ただ、事ごとに、感謝をもって祈りと願いをささげ、あなたがたの求めるところを神に申し上げるがよい。そうすれば、人知ではとうてい測り知ることのできない神の平安が、あなたがたの心と思いを、キリスト・イエスにおいて守るであろう。」

大郷先生を培った、沖縄の癩園の人びととの出会いにしても、フィリピンはルソン島北部山岳地サガダの人びととの出会いにしても、一食献金を通じて参与したネパールのプロジェクトにしても、全国縦断100Kmリレーにしても、スバルタスロンにしても、当初どうなることかと心配した人たちもいたであろうが、思い煩うことのない喜びと寛容と感謝と祈りによって支えられて、人知ではとても測り知ることのできない平安が与えられ、そして感謝したのであった。



松戸伝道集会所の聖卓と十字架

立教のチャブレンを（任期が来て）辞した後は、飛騨の高山へ単身赴任、職業訓練学校の木工の成果は、私の所属する松戸集會伝道所のチャブレンに燦然と輝いている。大郷先生の力作である“日本一の聖卓と十字架”が、威風堂堂と鎮座ましましています。“0からの出発”であった松戸集會と、そこに活躍していたマリア・フランソワの存在を偲びつつ、精魂を込めた木工作業の結果がこの大作を生んだのだった。

さて、いよいよ「あぶらむの里」の建設である。飛騨国府町の川上町長以下の要人たちは、大郷先生の実現しようとする夢に、全てを賭けてくれた。“それにしても大郷さんを支える人たちはどんな人たちなんだろうか?!”、“金もなく、管理組織も持たない人たちにこんなことができるのだろうか?!”と、夢の実現を訝がる声もあったと思う。しかし、土地取得に全面的便宜を提供していただき、大郷先生の情熱に賭けてくださったのだ。感謝あるのみ!というところである。そして契約も済み、船はすでに港を離れたのだ。

大郷先生のご家族、ことに奥方様の気持を察するに、「あぶらむの里」の実現に確信をもっていらっしゃることは思うが、心のどこかで“支え手たちがしっかりやってくださるかしら……”と、心配をされているのではないか。頑張らなければいけないと、それにつけても支え手の一人として、私もまた、禪の紐を引き締めている昨今である。

過日行われた「あぶらむの里」の発会式には、大郷先生の育てた立教のOB・OGたちが40人も集ったそうだ。頼もしい彼等の働きに期待したいのだが、この資金づくりに関しては、国府町や大郷先生ご一家に不安を与えないよう、OB・OGも支え手の一人として責任を持ってこれを推進しなければなるまい。過日募金趣意書作成の打ち合わせに集うた彼等に私が申し上げたことは、第一期3000万の目標達成のためには一人々々がその40分の1を、即ち75万を、是が非でも集めてくるという覚悟が必要だということであった。神様は、この世に必要なと思われることを必ず感謝して下さる。したがって、「あぶらむの里」はきっと実現するだろう。しかし、^{実現}支え手たちが甘えていては困るのだ。喜びのうちに、感謝をもって祈りと願いをささげるためには、一生懸命につとめること、己をささげつくすことが大切だ。

さあ、一丸となって頑張ろうではないか。

フィリピン・サガダ村

孤児院支援のお願い

私たちが10年間の交わりを持ってきた、フィリピンは山岳州サガダ村に、聖天使園という孤児院があります。この孤児院はフィリピン聖公会の聖マリア修道院によって運営されていて、現在612名の孤児たちが養育されています。

日本もかつてはそうであったように、発展途上の国は多くの孤児が見受けられます。出稼ぎ先での労災や栄養不足による短命など、様々な原因があります。

サガダの孤児院は、世界組織のCCF（クリスチャン・チルドレン・ファンド「キリスト教児童基金」、本部アメリカ・バージニア州）から支給される、一人年間3万円の生活費によってまかなわれております。しかし、年々増加する世界的孤児のため、ある程度の自活が要求され、1988年6月より、100名分の生活費削減が通達されました。

一口に自活といっても、窮乏化する一方のフィリピンにあっては容易なことではありません。しかしこれまでも、運営母体の修道院長のマザー・クレアは立派に、精一杯やってきました。ある時など私を豚小屋に案内し、「これがあなたがたからいただいたお金で買った子豚です。子供一人に一匹買い与え、世話をさせるのです。そして大きく育てた後、売って学資にあてるのです。子供たちには働くことの大切さを教えなくては」といって微笑むのでした。

昨年3月、私が現地を訪ねた時、消滅される100名の生活費捻出方法をめぐって深刻に議論していました。あらゆる可能性を模索していましたが、やはり無いソデはふれませんでした。結果として、独自に新しいスポンサーを探すこととなりました。これは決して容易な解決法ではありません。何故なら、彼らの3日間に渡る真剣な模索を私も側で見っていました。それは祈りに近いものでした。

相談の結果、日本で50人分のスポンサーを探してみることに致しました。現在多くの問題をかかえているあぶらむの会ですが、自分たちのことばかり言っているわけには行きませんが、こまった時はお互い様なのです。

私たちはこの通信を通して、アジアの人々の生の姿や声をお伝えして行きたい願っています。また、希望される会員の方々とフィリピンの子供たちとの直接的交わりの仲介を行ってゆきます。一方的に与えることで終わるのではなく、一つ

の支援を通して、相互の豊かな心の交流の実現を私たちは目指しています。一つの会社、団体、教会で一名支えてください。孤児一名につき年間3万円です。個人にあっては1/5, 1/10で結構ですので支えてください。何とぞよろしく願い申し上げます。

尚、ご支援下さる方は「フィリピン」と記入の上、下記へお送り下さいませ。

郵便振替 名古屋 0-88065 あぶらむの会

— お 礼 —

前号にて図々しくも「お願い」をしましたところ、沢山の方々より宿屋に必要なものをお送りいただきました。誠にありがとうございました。感謝の気持ちで一杯です。

また、これまでにご寄付も沢山の方々よりいただきました。併せてお礼申し上げます。

○あぶらむの宿 物品提供者（順不同・敬省略）

| | | | | | |
|------|------|------|-------|-------------|------|
| 木俣茂世 | 百井幸子 | 勝野敬子 | 中島 務 | 河野マリ子 | 高田建夫 |
| 筒井啓子 | 森 紀旦 | 鶴川 久 | 五百蔵久子 | 中村 洋 | 矢沢信夫 |
| 直井久枝 | 鈴木博士 | 中島澄子 | 新倉俊吾 | 名取麻子 | 中川 聡 |
| 古市 進 | 清水敦子 | 吉野敦子 | 吉原敬典 | 中村（技能訓練校職員） | |
| 田坂昭範 | | | | | |

○あぶらむの会へのこれまでの寄附者（順不同・敬省略）

| | | | | | |
|--------|-------|----------|-------|------|-------|
| 松戸集会 | 岸元忠義 | 加藤中英 | 本船坂久一 | 鈴木春子 | 高瀬由香他 |
| 室田 進 | 新田智恵子 | 及能隆行・まゆみ | 永井博子 | 牛島るい | |
| 愛楽園木曜会 | 阿部國治 | 鬼本照男 | 高松光子 | 熊谷一綱 | 高橋清子 |
| 西田邦昭他 | 阿部潮音 | 嘉数弘子 | 五百蔵久子 | 才藤雅敏 | |

後援会事務局だより

昨年(1981)の12月に開始した“あぶらむの里建設募金”は、お陰様で皆様のご協力により順調にすべり出すことができました。暮れのお忙しい時期にもかかわらず多くの方々からお申し込みいただきました。12月末に、あぶらむの里建設予定地の第一回目土地取得代金を支払う際、皆様からの募金を資金の一部に充てることができました。本当にありがとうございました。

12月27日現在の、募金の申し込み総額及び振り込み総額は以下の通りです。

申し込み総額 659万2024円

振り込み総額 516万1469円

目標額3000万円までには、まだまだ長い道のりですが、実現に向けて事務局も精一杯頑張りますので、益々のご協力をお願い致します。

送金先 郵便振替 東京7-255427 あぶらむの会後援会

銀行振込 第一勧業銀行池袋西口支店 190-1434235

あぶらむの会後援会 代表世話人 八代崇

事務局 〒182 東京都調布市染地3-1-373 西田方

TEL 0424(82)2051

○12月27日現在の募金申込者(順不同・敬称略)

| | | | | | |
|------------|-------|----------|-------|-------|--------|
| 高橋健人 | 染谷孝章 | 秋山大輔 | 篠田克雄 | 大木啓次 | 村守直芳 |
| 村守恵子 | 高橋正子 | 小川正夫 | 赤井充也 | 永井一恵 | 近藤和美 |
| 黒井ミヤ | 伊藤健三 | 岩浅紀久 | 鬼本照男 | 慎 忠志 | 林 英夫 |
| 高野 勇 | 鈴木千恵 | 山崎俊樹 | 甲藤善彦 | 山下泰弘 | 由美子・亮太 |
| 小川一清・幸子 | 滝沢助蔵 | 古市 進 | 浅香良平 | 久保田彰 | 君江 |
| 輿石 勇・千英乃 | 増山ふみ子 | 立川洋三 | 竹田 真 | 青柳真智子 | |
| 遠藤明子 | 藤吉康司 | 武藤勝弘 | 田中 誠 | 村瀬信也 | 堀切糸子 |
| 芥川英子 | 相沢牧人 | 湯浅雅弘 | 関根強一 | 三和 治 | 名取四郎 |
| ジーン・S・レーマン | 銅直幸子 | 森 弘之 | 加藤由香 | 松井健二 | |
| 高橋清子 | 百井幸子 | 河野正司・マリ子 | 浜田陽太郎 | 富永興之介 | |
| 原 好男 | 菊澤満喜子 | 福島震太 | 浅野純子 | 熊谷一綱 | 織田秀実 |

| | | | | | |
|-------|---------------------|-------|---------|---------|-------|
| 小笠原すわ | 塚田明人 | 谷合広彦 | 中島 力 | 国見 登 | 長山治之 |
| 梅崎耕司 | 佐藤 裕 | 伊藤みどり | 尾針恵子 | 尾針明宏 | 小沢福夫 |
| 矢澤信夫 | 尾形典男 | 赤尾昌人 | 土屋茂一 | 村田暁彦 | 横手佳子 |
| 荒木伸怡 | 阿久津富男 | 柳原 光 | 平林隆治 | 西田邦昭 | 荻野一郎 |
| 萩尾出穂 | 高瀬由香 | 斉藤 孝 | 淵上 治 | 三浦牧子 | 中沢秀子 |
| 川合武明 | 新倉俊吾・久乃 | 志村弘子 | 戴 国輝 | 村瀬孝雄 | 平井雷恵 |
| 梅原弘光 | 安田つた恵 | 高坂征男 | 柁原 勇 | 武澤信一 | 阿久津忠衛 |
| 小田部英幸 | 後藤信哉 | 本田リン | 高野アサノ | 根岸秀行 | 逸見敏郎 |
| 四ッ瀧勝平 | 枝元玲子 | 杉山千鶴子 | 塩田敏雄・純子 | 平岡真・和子 | |
| 澤木敬郎 | 佃 正昊 | 今井志づ | 野村浩一 | 鷯川雅行 | 川越恒雄 |
| 八代 崇 | 高田建夫・智子・祐介 | | 田代真美 | 松測信義 | 山本淑子 |
| 日下初子 | 立花 泉 | 近藤幸平 | 田中 司 | 和仁章幸 | 井上洋子 |
| 下田幸子 | 松島理恵 | 岩坪哲哉 | 鬼本博文 | 森田麻里子 | 森田 武 |
| 佐藤泰夫 | 北野春子 | 原川恭一 | 林しげ子 | 鈴木武次 | 阿部 信 |
| 大木隆幸 | B S A 第16支部OB会 | | 荻野 登 | 中村ひろ子 | 中島弘一 |
| 戸谷喜八郎 | 朝比奈誼 | 正木 実 | 沼尾 博 | 小林 進 | 酒井 駿 |
| 今里 伸 | 1987年立教高校S P F実行委員会 | | 金城瑞子・悦子 | 栗原謙二 | |
| 外村民彦 | 菊地栄三 | 永原照明 | 今村一夫 | 本間勇吉 | 筒井啓子 |
| 山田益男 | 山岸勇一郎 | 横山文彦 | 大島雅子 | 石井秀夫 | 梅本君江 |
| 大郷博・育 | 竹村真紀 | 吉村久美 | 辻 真理 | 曾我えり子 | 伊藤 隆 |
| 高田敏夫 | 阿波野弘子 | 阿部潮音 | 中澤絵美 | 深野 毅 | 池崎純一 |
| 内藤 武 | 清水孝郎 | 星野一期 | 佐々木雄三 | 岩佐香代子 | 矢沢貞子 |
| 杉浦教二郎 | 森田利光 | 伴 義裕 | 伊藤友昭 | 唐沢秩子 | 水上タカ |
| 佐藤一宏 | 舛岡 泉 | 西村仁三郎 | 森田トミ | 原 真也 | 古沢タイ |
| 竹田日出子 | 藤田富雄 | 萱間隆夫 | 木村敦子 | 川上玲子 | 山本顕一 |
| 青島和子 | 長江 弘 | 野崎節子 | 入沢喜夫 | 三浦一雄 | 西村陸子 |
| 川嶋 直 | 愛場謙嗣 | 塚田 理 | 杉村 進 | 笹岡淳也 | 堀尾一郎 |
| 小泉恵子 | 須藤真起子 | 佐藤勝造 | 須賀広・裕子 | 川上詩朗・美砂 | |
| 中山 弘 | 山下 明 | 佐藤良徳 | 中里晴彦 | 須貝千世子 | 甲原 一 |
| 松村 幸 | 松村憲子 | 石井正郎 | 風戸邦彦・修子 | 洞田秋夫他7名 | |